ひかりの素足

宮沢賢治

一、山小屋

鳥の声があんまりやかましいので一郎は眼をさましました。

もうすっかり夜があけてゐたのです。

小屋の隅から三本の青い日光の棒が斜めにまっすぐに兄弟の頭の上を越して向ふの萱（かや）の壁の山刀やはむばきを照らしてゐました。

土間のまん中では榾（ほだ）が赤く燃えてゐました。日光の棒もそのけむりのために青く見え、またそのけむりはいろいろなかたちになってついついとその光の棒の中

を通って行くのでした。

「ほう、すっかり夜ぁ明げだ。」一郎はひとりごとを云(い)ひながら弟の楢夫(ならを)の方に向き直りました。楢夫の顔はりんごのやうに赤く口をすこしあいてまだすやすや睡(ねむ)って居ました。白い歯が少しばかり見えてゐましたので一郎はいきなり指でカチンとその歯をはじきました。

楢夫は目をつぶったまゝ一寸(ちょっと)顔をしかめましたがまたすうすう息をしてねむりました。

「起ぎろ、楢夫、夜ぁ明げだ、起ぎろ。」一郎は云ひながら楢夫の頭をぐらぐらゆすぶりました。

楢夫はいやさうに顔をしかめて何かぶつぶつ云って
ゐましたがたうとううすく眼を開きました。そしてい
かにもびっくりしたらしく
「ほ、山さ来てらたもな。」とつぶやきました。
「昨夜（ゆべな）、今朝方（けさかだ）だ※［＃小書き平仮名た、240-7］がな、
火ぁ消（け）でらたな、覚（おべ）だが。」
一郎が云ひました。
「知らなぃ。」
「寒くてさ。お父さん起きて又燃やしたやうだっ
けぁ。」
楢夫は返事しないで何かぼんやりほかのことを考え

てゐるやうでした。
「お父さん外(そど)で稼(かせ)いでら。さ、起ぎべ。」
「うん。」
　そこで二人は一所(いっしょ)にくるまって寝た小さな一枚の布団から起き出しました。そして火のそばに行きました。楢夫はけむさうにめをこすり一郎はじっと火を見てゐたのです。
　外では谷川がごうごうと流れ鳥がツンツン鳴きました。
　その時にはかにまぶしい黄金(きん)の日光が一郎の足もとに流れて来ました。

顔をあげて見ますと入口がパッとあいて向ふの山の雪がつんつんと白くかゞやきお父さんがまっ黒に見えながら入って来たのでした。

「起ぎだのが。昨夜(ゆべな)寒ぐなぃがったが。」

「いゝえ。」

「火ぁ消(け)でらたもな。おれぁ二度起ぎで燃やした。さあ、口漱(すす)げ、飯(まま)でげでら、楢夫。」

「うん。」

「家ど山どどっちぁ好(い)い。」

「山の方ぁい、い※［#小書き平仮名ん、241-7］とも学校さ行がれなぃもな。」

するとお父さんが鍋（なべ）を少しあげながら笑ひました。一郎は立ちあがって外に出ました。楢夫もつづいて出ました。

何といふきれいでせう。空がまるで青びかりでツルツルしてその光はツンツンと二人の眼にしみ込みまた太陽を見ますとそれは大きな空の宝石のやうに橙（だいだい）や緑やかゞやきの粉をちらしまぶしさに眼をつむりますと今度はその蒼黒（あをぐろ）いくらやみの中に青あをと光って見えるのです、あたらしく眼をひらいては前の青ぞらに桔梗（ききやう）いろや黄金（きん）やたくさんの太陽のかげぼふしがくらくらとゆれてかゝってゐます。

一郎はかけひの水を手にうけました。かけひからはつららが太い柱になって下までとゞき、水はすきとほって日にかゞやきまたゆげをたてていかにも暖かさうに見えるのでしたがまことはつめたく寒いのでした。一郎はすばやく口をそゝぎそれから顔もあらひました。それからあんまり手がつめたいのでお日さまの方へ延ばしました。それでも暖まりませんでしたからのどにあてました。

その時楢夫（ならを）も一郎のとほりまねをしてやってゐましたが、たうとうつめたくてやめてしまひました。まったく楢夫の手は霜やけで赤くふくれてゐました。一郎

はいきなり走って行って
「冷（つめ）だぁが。」と云ひながらそのぬれた小さな赤い手を両手で包んで暖めてやりました。
　さうして二人は又小屋の中にはひりました。
　お父さんは火を見ながらじっと何か考へ、鍋はことこと鳴ってゐました。
　二人も座りました。
　日はもうよほど高く三本の青い日光の棒もだいぶ急になりました。
　向ふの山の雪は青ぞらにくっきりと浮きあがり見てゐますと何だかこゝろが遠くの方へ行くやうでした。

にはかにそのいたゞきにパッとけむりか霧のやうな白いぼんやりしたものがあらはれました。

それからしばらくたってフィーとするどい笛のやうな声が聞えて来ました。

すると楢夫がしばらく口をゆがめて変な顔をしてゐましたがたうとうどうしたわけかしくしく泣きはじめました。一郎も変な顔をして楢夫を見ました。

お父さんがそこで

「何した、家さ行ぐだぐなったのが、何した。」とたづねましたが楢夫は両手を顔にあてて返事もしないで却(かへ)ってひどく泣くばかりでした。

「何した、楢夫、腹痛ぃが。」一郎もたづねましたがやっぱり泣くばかりでした。

お父さんは立って楢夫の額に手をあてて見てそれからしっかり頭を押へました。

するとだんだん泣きやんでつひにはたゞしくしく泣きじゃくるだけになりました。

「何(な)して泣ぃだ。家さ行ぐだぃぐなったべぁな。」お父さんが云ひました。

「うんにゃ。」楢夫は泣きじゃくりながら頭をふりました。

「どごが痛くてが。」

「うんにや。」

「そだらなして泣ぃだりゃ、男などぁ泣がなぃだな。」

「怖(ぉ)っかなぃ。」まだ泣きながらやっと答へるのでした。

「なして怖っかなぃ。お父さんも居るし兄(あぃ)なも居るし昼まで明りくて何(な)ってても怖っかなぃごとぁ無いぢやぃ。」

「うんう、怖っかなぃ。」

「何ぁ怖っかなぃ。」

「風の又三郎ぁ云ったたか。」

「何て云った。風の又三郎など、怖っかなぐなぃ。何て云った。」

「お父さんおりゃさ新らしきもの着せるって云ったか。」楢夫はまた泣きました。一郎もなぜかぞっとしました。けれどもお父さんは笑ひました。

「ああははは、風の又三郎ぁ、いゝ事(ごと)云ったな。四月になったら新らし着物買ってけらな。一向泣ぐごとぁないぢゃい。泣ぐな泣ぐな。」

「泣ぐな。」一郎も横からのぞき込んでなぐさめました。

「もっと云ったか。」楢夫(ならを)はまるで眼をこすってまっかにして云ひました。

「何て云った。」

「それがらお母(つか)さん、おりゃのごと湯さ入れで洗ふて

云ったか。」

「あゝはは、そいづぁ噓ぞ。楢夫などぁいっつも一人して湯さ入るもな。風の又三郎などぁ偽こぎさ。泣ぐな、泣ぐな。」

お父さんは何だか顔色を青くしてそれに無理に笑ってゐるやうでした。一郎もなぜか胸がつまって笑へませんでした。楢夫はまだ泣きやみませんでした。

「さあお飯食べし泣ぐな。」

楢夫は眼をこすりながら変に赤く小さくなった眼で一郎を見ながら又言ひました。

「それがらみんなしておりゃのごと送って行ぐて云っ

たか。」
「みんなして汝(うな)のごと送てぐど。そいづぁなぁ、うな立派になってどごさが行ぐ時ぁみんなして送ってぐづごとさ。みんないゝごとばがりだ。泣ぐな。な、泣ぐな。春になったら盛岡祭見さ連(つれ)でぐはんて泣ぐな。な。」
一郎はまっ青になってだまって日光に照らされたたき火を見てゐましたが、この時やっと云ひました。
「なあに風の又三郎など、怖(お)っかなぐない。いっつも何だりかだりって人だますぢゃぃ。」
楢夫もやうやく泣きじゃくるだけになりました。け

むりの中で泣いて眼をこすったもんですから眼のまはりが黒くなってちょっと小さな狸（たぬき）のやうに見えました。

お父さんはなんだか少し泣くやうに笑って

「さあもう一（ひと）がへり面（つら）洗なぃやなぃ。」と云ひながら立ちあがりました。

二、峠

ひるすぎになって谷川の音もだいぶかはりました。

何だかあたたかくそしてどこかおだやかに聞えるので

した。
お父さんは小屋の入口で馬を引いて炭をおろしに来た人と話してゐました。ずゐぶん永いこと話してゐました。それからその人は炭俵を馬につけはじめました。二人は入口に出て見ました。
馬はもりもりかひばをたべてそのたてがみは茶色でばさばさしその眼は大きくて眼の中にはさまざまのをかしな器械が見えて大へんに気の毒に思はれました。
お父さんが二人に言ひました。
「そいでぁうなだ、この人さ随（つ）ぃで家さ戻れ。この人ぁ楢鼻（ならはな）まで行がはんて。今度の土曜日に天気ぁ好

がったら又おれぁ迎ぃに行がはんてなぃ。」
あしたは月曜日ですから二人とも学校へ出るために家へ帰らなければならないのでした。
「そだら行がんす。」一郎が云ひました。
「うん、それがら家さ戻ったらお母（つか）さんさ、ついでの人さたのんで大きな方の鋸（のこぎり）をよごして呉（け）ろって云へやぃな、いゝが。忘れなよ。家まで丁度一時半かゞらは※［＃小書き平仮名ん、246-2］てゆっくり行っても三時間半にあ戻れる。のどぁ乾ぃでも雪たべなやぃ。」
「うん。」楢夫（ならを）が答へました。楢夫はもうすっかり機嫌（きげん）を直してピョンピョン跳んだりしてゐました。

馬をひいた人は炭俵をすっかり馬につけてつなを馬のせなかで結んでから

「さ、そいでぃ、行ぐまちゃ。わらし達ぁ先に立ったら好（い）がべがな。」と二人のお父さんにたづねました。

「なぁに随（つい）で行ぐごたんす。どうがお願ぁ申さんすぢゃ。」お父さんは笑っておじぎをしました。

「さ、そいでぁ、まんつ、」その人は牽（ひき）づなを持ってあるき出し鈴はツァリンツァリンと鳴り馬は首を垂れてゆっくりあるきました。

一郎は楢夫をさきに立ててそのあとに跡（つ）いて行きました。みちがよくかたまってじっさい気持ちがよく、

空はまっ青にはれて、却って少しこはいくらゐでした。

「房下がってるぢゃぃ。」にはかに楢夫が叫びました。

一郎はうしろからよく聞えなかったので「何や。」とたづねました。

「あの木さ房下がってるぢゃぃ。」楢夫が又云ひました。

見るとすぐ崖の下から一本の木が立ってゐてその枝には茶いろの実がいっぱいに房になって下って居りました。一郎はしばらくそれを見ました。それから少し馬におくれたので急いで追ひつきました。馬を引いた人はこの時ちょっとうしろをふりかへってこっちをすかすやうにして見ましたがまた黙ってあるきだしました。

みちの雪はかたまってはゐましたがでこぼこでしたから馬はたびたびつまづくやうにしました。楢夫もあたりを見てあるいてゐましたのでやはりたびたびつまづきさうにしました。

「下見で歩げ。」と一郎がたびたび云ったのでした。

みちはいつか谷川からはなれて大きな象のやうな形の丘の中腹をまはりはじめました。栗（くり）の木が何本か立って枯れた乾いた葉をいっぱい着け、鳥がちょんちょんと鳴いてうしろの方へ飛んで行きました。そして日の光がなんだか少しうすくなり雪がいままでより暗くそして却って強く光って来ました。

そのとき向ふから一列の馬が鈴をチリンチリンと鳴らしてやって参りました。

みちが一（ひと）むらの赤い実をつけたまゆみの木のそばまで来たとき両方の人たちは行きあひました。兄弟の先に立った馬は一寸（ちょっと）みちをよけて雪の中に立ちました。兄弟も膝（ひざ）まで雪にはひってみちをよけました。

「早ぃな。」

「早がったな。」挨拶（あいさつ）をしながら向ふの人たちや馬は通り過ぎて行きました。

ところが一ばんおしまひの人は挨拶をしたなり立ちどまってしまひました。馬はひとりで少し歩いて行っ

てからうしろから「どう。」と云はれたのでとまりました。兄弟は雪の中からみちにあがり二人とならんで立ってゐた馬もみちにあがりました。ところが馬を引いた人たちはいろいろ話をはじめました。

兄弟はしばらくは、立って自分たちの方の馬の歩き出すのを待ってゐましたがあまり待ち遠しかったのでたうとう少しづつあるき出しました。あとはもう峠を一つ越えればすぐ家でしたし、一里もないのでしたからそれに天気も少しは曇ったってみちはまっすぐにつゞいてゐるのでしたから何でもないと一郎も思ひました。

馬をひいた人は兄弟が先に歩いて行くのを一寸(ちょっと)よこめで見てゐましたがすぐあとから追ひつくつもりらしくだまって話をつゞけました。

楢夫はもう早くうちへ帰りたいらしくどんどん歩き出し一郎もたびたびうしろをふりかへって見ましたが馬が雪の中で茶いろの首を垂れ二人の人が話し合って白い大きな手甲がちらっと見えたりするだけでしたからやっぱり歩いて行きました。

みちはだんだんのぼりになりつひにはすっかり坂になりましたので楢夫はたびたび膝(ひざ)に手をつっぱって「うんうん」とふざけるやうにしながらのぼりました。

一郎もそのうしろからはあはあ息をついて

「よう、坂道、よう、山道」なんて云ひながら進んで行きました。

けれどもたうとう楢夫は、つかれてくるりとこっちを向いて立ちどまりましたので、一郎はいきなりひどくぶっつかりました。

「疲(こは)いが。」一郎もはあはあしながら云ひました。来た方を見ると路(みち)は一すぢずうっと細くついて人も馬ももう丘のかげになって見えませんでした。いちめんまっ白な雪、(それは大へんくらく沈んで見えました。空がすっかり白い雲でふさがり太陽も大きな銀の盤の

やうにくもって光ってゐたのです）がなだらかに起伏しそのところどころに茶いろの栗（くり）や柏（かしは）の木が三本四本づつちらばってゐるだけじつにしぃんとして何ともいへないさびしぃのでした。けれども楢夫はその丘の自分たちの頭の上からまっすぐに向ふへかけおりて行く一疋（ぴき）の鷹（たか）を見たとき高く叫びました。

「しっ、鳥だ。しゅう。」

一郎はだまってゐました。けれどもしばらく考えてから云ひました。

「早ぐ峠越えるべ。雪降って来るぢょ。」

ところが丁度そのときです。まっしろに光ってゐる

白いそらに暗くゆるやかにつらなってゐた峠の頂の方が少しぼんやり見えて来ました。そしてまもなく小さな小さな乾いた雪のこなが少しばかりちらっちらっと二人の上から落ちて参りました。

「さあ楢夫、早ぐのぼれ、雪降って来た。上さ行げば平らだはんて。」一郎が心配さうに云ひました。

楢夫は兄の少し変わった声を聞いてにはかにあわてました。そしてまるでせかせかとのぼりました。

「あんまり急ぐな。大丈夫だはんて、なあにあど一里も無ぃも。」一郎も息をはづませながら云ひました。

けれどもじっさい二人とも急がずに居られなかったの

です。めの前もくらむやうに急ぎました。あんまり急ぎすぎたのでそれはながくつゞきませんでした。雪がまったくひどくなって来た方も行く方もまるで見えず二人のからだもまっ白になりました。そして楢夫(ならを)が泣いていきなり一郎にしがみつきました。

「戻るが、楢夫。戻るが。」一郎も困ってさう云ひながら来た下の方を一寸(ちょっと)見ましたがとてももう戻ろうとは思はれませんでした。それは来た方がまるで灰いろで穴のやうにくらく見えたのです。それにくらべては峠の方は白く明るくおまけに坂の頂上だってもうぢきでした。そこまでさへ行けばあとはもう十町もずうっと

丘の上で平らでしたし来るときは山鳥も何べんも飛び立ち灌木（くわんぼく）の赤や黄いろの実もあったのです。

「さあもう一あしだ。歩（あ）べ。上まで行げば雪も降ってなぃしみぢも平らになる。歩べ、怖（お）っかなぐなぃはんて歩べ。あどがらぁの人も馬ひで来るしそれ、泣がなぃで、今度ぁゆっくり歩べ。」一郎は楢夫の顔をのぞき込んで云ひました。楢夫は涙をふいてわらひました。楢夫の頬（ほほ）に雪のかけらが白くついてすぐ溶けてなくなったのを一郎はなんだか胸がせまるやうに思ひました。一郎が今度は先に立ってのぼりました。みちももうそんなにけはしくはありませんでしたし雪もすこし

薄くなったやうでした。それでも二人の雪沓（ゆきぐつ）は早くも一寸も埋まりました。

だんだんいたゞきに近くなりますと雪をかぶった黒いゴリゴリの岩がたびたびみちの両がはに出て来ました。

二人はだまってなるべく落ち着くやうにして一足づつのぼりました。一郎はばたばた毛布をうごかしてからだから雪をはらったりしました。

そしていゝことはもうそこが峠のいたゞきでした。

「来た来た。さあ、あどぁ平らだぞ、楢夫。」

一郎はふりかへって見ました。楢夫は顔をまっかに

してはあはあしながらやっと安心したやうにわらひました。けれども二人の間にもこまかな雪がいっぱいに降ってゐました。

「馬もきっと坂半分ぐらゐ登ったな。叫んで見べが。」

「うん。」

「いゝが、一二三、ほおお。」

声がしんと空へ消えてしまひました。返事もなくこだまも来ずかへってそらが暗くなって雪がどんどん舞ひおりるばかりです。

「さあ、歩(あ)べ。あと三十分で下りるにい。」

一郎はまたあるきだしました。

にはかに空のほうでヒィウと鳴って風が来ました。雪はまるで粉のやうにけむりのやうに舞ひあがりくるしくて息もつかれずきものすきまからはひやひやとからだにはひりました。兄弟は両手を顔にあてて立ちどまってゐましたがやっと風がすぎたので又あるき出さうとするときこんどは前より一そうひどく風がやって来ました。その音はおそろしい笛のやう、二人のからだも曲げられ足もとをさらさら雪の横にながれるのさへわかりました。

たうげのいたゞきはまったくさっき考へたのとはちがってゐたのです。楢夫はあんまりこゝろぼそくなっ

て一郎にすがらうとしました。またうしろをふりかへっても見ました。けれども一郎は風がやむとすぐ歩き出しましたし、うしろはまるで暗く見えましたから楢夫はほんたうに声を立てないで泣くばかりよちよち兄に追ひ付いて進んだのです。

雪がもう沓（くつ）のかゝと一杯でした。ところどころには吹き溜（だま）りが出来てやっとあるけるぐらゐでした。それでも一郎はずんずん進みました。楢夫もそのあしあとを一生けん命ついて行きました。一郎はたびたびうしろをふりかへってはゐましたがそれでも楢夫はおくれがちでした。風がひゅうと鳴って雪がぱっとつめたい

けむりをあげますと、一郎は少し立ちどまるやうにし楢夫は小刻みに走って兄に追ひすがりました。

　けれどもまだその峯みちを半分も来ては居りませんでした。吹きだまりがひどく大きくなってたびたび二人はつまづきました。

　一郎は一つの吹きだまりを越えるとき、思ったより雪が深くてたうとう足をさらはれて倒れました。一郎はからだや手やすっかり雪になって軋（きし）るやうに笑って起きあがりましたが楢夫はうしろに立ってそれを見てこはさに泣きました。

「大丈夫だ。楢夫、泣ぐな。」一郎は云ひながら又ある

きました。けれどもこんどは楢夫がころびました。そして深く雪の中に手を入れてしまつて急に起きあがりもできずおじぎのときのやうに頭をさげてそのまゝ泣いてゐたのです。一郎はすぐ走り戻つてだき起しました。そしてその手の雪をはらつてやりそれから、

「さあも少しだ。歩げるが。」とたづねました。

「うん」と楢夫は云つてゐましたがその眼はなみだで一杯になりじつと向ふの方を見、口はゆがんで居りました。

雪がどんどん落ちて来ます。それに風が一そうはげしくなりました。二人は又走り出しましたけれどもも

うつまづくばかり一郎がころび楢夫がころびそれにいまはもう二人ともみちをあるいてるのかどうか前無かった黒い大きな岩がいきなり横の方に見えたりしました。

風がまたやって来ました。雪は塵（ちり）のやう砂のやうけむりのやう楢夫はひどくせき込んでしまひました。

そこはもうみちではなかったのです。二人は大きな黒い岩につきあたりました。

一郎はふりかへって見ました。二人の通って来たあとはまるで雪の中にほりのやうについてゐました。

「路まちがった。戻らないばわがなぃ。」

一郎は云っていきなり楢夫の手をとって走り出さうとしましたがもうたゞの一足ですぐ雪の中に倒れてしまひました。

楢夫はひどく泣きだしました。

「泣ぐな。雪はれるうぢ此処(ここ)に居るべし泣ぐな。」一郎はしっかりと楢夫を抱いて岩の下に立って云ひました。

風がもうまるできちがひのやうに吹いて来ました。

いきもつけず二人はどんどん雪をかぶりました。

「わがなぃ。　わがなぃ。」楢夫が泣いて云ひました。

その声もまるでちぎるやうに風が持って行ってしまひ

ました。一郎は毛布をひろげてマントのまゝ楢夫(ならを)を抱きしめました。

一郎はこのときはもうほんたうに二人とも雪と風で死んでしまふのだと考えてしまひました。いろいろなことがまるでまはり燈籠(どうろう)のやうに見えて来ました。正月に二人は本家(ほんけ)に呼ばれて行ってみんながみかんをたべたとき楢夫がすばやく一つたべてしまっても一つを取ったので一郎はいけないといふやうにひどく目で叱(しか)ったのでした、そのときの楢夫の霜やけの小さな赤い手などがはっきり一郎に見えて来ました。いきが苦しくてまるでえらえらする毒をのんでゐるやうでした。

一郎はいつか雪の中に座ってしまってゐました。そして一そう強く楢夫を抱きしめました。

三、うすあかりの国

けれどもけれどもそんなことはまるでまるで夢のやうでした。いつかつめたい針のやうな雪のこなもなんだかなまぬるくなり楢夫もそばに居なくなって一郎はたゞひとりぼんやりくらい藪（やぶ）のやうなところをあるいて居りました。

そこは黄色にぼやけて夜だか昼だか夕方かもわから

ずよもぎのやうなものがいっぱいに生えあちこちには黒いやぶらしいものがまるでいきもののやうにいきをしてゐるやうに思はれました。

　一郎は自分のからだを見ました。そんなことが前からあったのか、いつかからだには鼠（ねずみ）いろのきれが一枚まきついてあるばかりおどろいて足を見ますと足ははだしになってゐて今までもよほど歩いて来たらしく深い傷がついて血がだらだら流れて居りました。それに胸や腹がひどく疲れて今にもからだが二つに折れさうに思はれました。　一郎はにはかにこはくなって大声に泣きました。

けれどもそこはどこの国だったのでせう。ひっそりとして返事もなく空さへもなんだかがらんとして見れば見るほど変なおそろしい気がするのでした。それににはかに足が灼くやうに傷んで来ました。

「楢夫は。」ふっと一郎は思ひ出しました。

「楢夫ぉ。」一郎はくらい黄色なそらに向って泣きながら叫びました。

しいんとして何の返事もありませんでした。一郎はたまらなくなってもう足の痛いのも忘れてはしり出しました。すると俄かに風が起って一郎のからだについてゐた布はまっすぐにうしろの方へなびき、一郎はそ

の自分の泣きながらはだしで走って行ってぼろぼろの布が風でうしろへなびいてゐる景色を頭の中に考へて一そう恐ろしくかなしくてたまらなくなりました。

「楢夫ぉ。」一郎は又叫びました。

「兄（あい）※［＃小書き平仮名な、255-15］。」かすかなかすかな声が遠くの遠くから聞えました。一郎はそっちへかけ出しました。そして泣きながら何べんも「楢夫ぉ、楢夫ぉ。」と叫びました。返事はかすかに聞えたり又返事したのかどうか聞えなかったりしました。

一郎の足はまるでまっ赤になってしまひました。そしてもう痛いかどうかもわからず血は気味悪く青く

光ったのです。

一郎ははしってはしって走りました。

そして向ふに一人の子供が丁度風で消えようとする蠟燭（らふそく）の火のやうに光ったり又消えたりぺかぺかしてゐるのを見ました。

それが顔に両手をあてて泣いてゐる楢夫（ならを）でした。一郎はそばへかけよりました。そしてにはかに足がぐらぐらして倒れました。それから力いっぱい起きあがって楢夫を抱かうとしました。楢夫は消えたりともったりしきりにしてゐましたがだんだんそれが早くなりたうとうその変りもわからないやうになって一郎はしっ

かりと楢夫を抱いてゐました。

「楢夫、僕たちどこへ来たらうね。」一郎はまるで夢の中のやうに泣いて楢夫の頭をなでてやりながら云ひました。その声も自分が云ってゐるのか誰かの声を夢で聞いてゐるのかわからないやうでした。

「死んだんだ。」と楢夫は云ってまたはげしく泣きました。

一郎は楢夫の足を見ました。やっぱりはだしでひどく傷がついて居りました。

「泣かなくってもいゝんだよ。」一郎は云ひながらあたりを見ました。ずうっと向ふにぼんやりした白びか

りが見えるばかりしいんとしてなんにも聞えませんでした。

「あすこの明るいところまで行って見よう。きっとうちがあるから、お前あるけるかい。」

一郎が云ひました。

「うん。おっかさんがそこに居るだろうか。」

「居るとも。きっと居る。行かう。」

一郎はさきになってあるきました。そらが黄いろでぼんやりくらくていまにもそこから長い手が出て来さうでした。

足がたまらなく痛みました。

「早くあすこまで行かう。あすこまでさへ行けばいゝんだから。」一郎は自分の足があんまり痛くてバリバリ白く燃えてるやうなのをこらへて云ひました。けれども楢夫はもうとてもたまらないらしく泣いて地面に倒れてしまひました。

「さあ、兄さんにしっかりつかまるんだよ。走って行くから。」一郎は歯を喰ひしばって痛みをこらへながら楢夫を肩にかけました。そして向ふのぼんやりした白光をめがけてまるでからだもちぎれるばかり痛いのを堪（こら）へて走りました。それでももうとてもたまらなくなって何べんも倒れました。倒れてもまた一生懸命に

起きあがりました。

ふと振りかへって見ますと来た方はいつかぼんやり灰色の霧のやうなものにかくれてその向ふを何かうす赤いやうなものがひらひらしながら一目散に走って行くらしいのです。

一郎はあんまりの怖さに息もつまるやうにおもひました。それでもこらへてむりに立ちあがってまた楢夫を肩にかけました。楢夫はぐったりとして気を失ってゐるやうでした。一郎は泣きながらその耳もとで、

「楢夫、しっかりおし、楢夫、兄さんがわからないかい。楢夫。」と一生けん命呼びました。

楢夫はかすかにかすかに眼をひらくやうにはしましたけれどもその眼には黒い色も見えなかったのです。一郎はもうあらんかぎりの力を出してそこら中いちめんちらちらちらちら白い火になって燃えるやうに思ひながら楢夫を肩にしてさっきめざした方へ走りました。足がうごいてゐるかどうかもわからずからだは何か重い巌（いは）に砕かれて青びかりの粉になってちらけるやう何べんも何べんも倒れては又楢夫を抱き起して泣きながらしっかりとかゝへ夢のやうに又走り出したのでした。それでもいつか一郎ははじめにめざしたうすあかるい処（ところ）に来ては居ました。けれどもそこは決していゝ処

ではありませんでした。却(かへ)って一郎はからだ中凍ったやうに立ちすくんでしまひました。すぐ眼の前は谷のやうになった窪地(くぼち)でしたがその中を左から右の方へ何ともいへずいたましいなりをした子供らがぞろぞろ追はれて行くのでした。わづかばかりの灰いろのきれをからだにつけた子もあれば小さなマントばかりはだかに着た子もありました。瘠(や)せて青ざめて眼ばかり大きな子、髪の赭(あか)い小さな子、骨の立った小さな膝(ひざ)を曲げるやうにして走って行く子、みんなからだを前にまげておどおど何かを恐れ横を見るひまもなくたゞふかくふかくため息をついたり声を立てないで泣いたり、ぞ

ろぞろ追はれるやうに走って行くのでした。みんな一郎のやうに足が傷(きずつ)いてゐたのです。そして本たうに恐ろしいことはその子供らの間を顔のまっ赤な大きな人のかたちのものが灰いろの棘(とげ)のぎざぎざ生えた鎧(よろひ)を着て、髪などはまるで火が燃えてゐるやう、たゞれたやうな赤い眼をして太い鞭(むち)を振りながら歩いて行くのでした。その足が地面にあたるときは地面はがりがり鳴りました。一郎はもう恐ろしさに声も出ませんでした。

　楢夫ぐらゐの髪のちゞれた子が列の中に居ましたがあんまり足が痛むと見えてたうとうよろよろつまづき

ました。そして倒れさうになって思はず泣いて「痛いよう。おっかさん。」と叫んだやうでした。するとすぐ前を歩いて行ったあの恐ろしいものは立ちどまってこっちを振り向きました。その子はよろよろして恐ろしさに手をあげながらうしろへ遁（に）げようとしましたら忽（たちま）ちその恐ろしいものの口がぴくっとうごきばっと鞭が鳴ってその子は声もなく倒れてもだえました。あとから来た子供らはそれを見てもたゞふらふらと避けて行くだけ一語も云ふものがありませんでした。倒れた子はしばらくもだえてゐましたがそれでもいつかさっきの足の痛みなどは忘れたやうに又よろよろと

立ちあがるのでした。

一郎はもう行くにも戻るにも立ちすくんでしまひました。俄(にはか)に楢夫が眼を開いて

「お父さん。」と高く叫んで泣き出しました。すると丁度下を通りかかった一人のその恐ろしいものはそのゆがんだ赤い眼をこっちに向けました。一郎は息もつまるやうに思ひました。恐ろしいものはむちをあげて下から叫びました。

「そこらで何をしてるんだ。下りて来い。」

一郎はまるでその赤い眼に吸ひ込まれるやうな気がしてよろよろ二三歩そっちへ行きましたがやっとふみ

とまってしっかり楢夫を抱きました。その恐ろしいものは頬をぴくぴく動かし歯をむき出して咆えるやうに叫んで一郎の方に登って来ました。そしていつか一郎と楢夫とはつかまれて列の中に入ってゐたのです。ことに一郎のかなしかったことはどうしたのか楢夫が歩けるやうになってはだしでその痛い地面をふんで一郎の前をよろよろ歩いてゐることでした。一郎はみんなと一緒に追はれてあるきながら何べんも楢夫の名を低く呼びました。けれども楢夫はもう一郎のことなどは忘れたやうでした。たゞたびたびおびえるやうにうしろに手をあげながら足の痛さによろめきながら一生け

ん命歩いてゐるのでした。一郎はこの時はじめて自分たちを追ってゐるものは鬼といふものなこと、又楢夫などに何の悪いことがあってこんなつらい目にあふのかといふことを考へました。そのとき楢夫がたうとう一つの赤い稜（かど）のある石につまづいて倒れました。鬼のむちがその小さなからだを切るやうに落ちました。一郎はぐるぐるしながらその鬼の手にすがりました。

「私を代りに打って下さい。楢夫はなんにも悪いことがないのです。」

鬼はぎょっとしたやうに一郎を見てそれから口がしばらくぴくぴくしてゐましたが大きな声で斯（か）う云ひま

した。その歯がギラギラ光ったのです。

「罪はこんどばかりではないぞ。歩け。」

一郎はせなかがシィンとしてまはりがくるくる青く見えました。それからからだ中からつめたい汗が湧き(わ)ました。

こんなにして兄弟は追はれて行きました。けれどもだんだんなれて来たと見えて二人ともなんだか少し楽になったやうにも思ひました。ほかの人たちの傷ついた足や倒れるからだを夢のやうに横の方に見たのです。それからにはかにあたりがぼんやりくらくなりました。それから黒くなりました。追はれて行く子供らの青じろい列

ばかりその中に浮いて見えました。

　だんだん眼が闇（やみ）になれて来た時一郎はその中のひろい野原にたくさんの黒いものがじっと座ってゐるのを見ました。微（かす）かな青びかりもありました。それらはみなからだ中黒い長い髪の毛で一杯に覆はれてまっ白な手足が少し見えるばかりでした。その中の一つがどういふわけか一寸（ちよつと）動いたと思ひますと俄（には）かにからだもちぎれるやうな叫び声をあげてもだえまはりました。そしてまもなくその声もなくなって一かけの泥のかたまりのやうになってころがるのを見ました。そしてだんだん眼がなれて来たときその闇の中のいきものは刀の

刃のやうに鋭い髪の毛でからだを覆はれてゐること一寸でも動けばすぐからだを切ることがわかりました。

　その中をしばらくしばらく行ってからまたあたりが少し明るくなりました。そして地面はまっ赤でした。前の方の子供らが突然烈しく泣いて叫びました。列もとまりました。鞭の音や鬼の怒り声が雹や雷のやうに聞えて来ました。一郎のすぐ前を楢夫がよろよろしてゐるのです。まったく野原のその辺は小さな瑪瑙のかけらのやうなものでできてゐて行くものの足を切るのでした。

　鬼は大きな鉄の沓をはいてゐました。その歩くたび

に瑪瑙はガリガリ砕けたのです。一郎のまはりからも叫び声が沢山起りました。楢夫も泣きました。

「私たちはどこへ行くんですか。どうしてこんなつらい目にあふんですか。」楢夫はとなりの子にたづねました。

「あたしは知らない。痛い。痛いなぁ。おっかさん。」

その子はぐらぐら頭をふって泣き出しました。

「何を云ってるんだ。みんなきさまたちの出かしたこった。どこへ行くあてもあるもんか。」

うしろで鬼が咆(ほ)えて又鞭をならしました。

野はらの草はだんだんだん荒くだんだんだん鋭くなりました。

前の方の子供らは何べんも倒れては又力なく起きあがり足もからだも傷つき、叫び声や鞭（むち）の音はもうそれだけでも倒れさうだったのです。

楢夫がいきなり思ひ出したやうに一郎にすがりついて泣きました。

「歩け。」鬼が叫びました。鞭が楢夫を抱いた一郎の腕をうちました。一郎の腕はしびれてわからなくなってただびくびくうごきました。楢夫がまだすがりついてゐたので鬼が又鞭をあげました。

「楢夫は許して下さい。楢夫は許して下さい。」一郎は泣いて叫びました。

「歩け。」鞭が又鳴りましたので一郎は両腕であらん限り楢夫をかばひました。かばひながら一郎はどこからか

「にょらいじゅりゃうぼん第十六。」といふやうな語（ことば）がかすかな風のやうに又匂（にほひ）のやうに一郎に感じました。すると何だかまはりがほっと楽になったやうに思って

「にょらいじゅりゃうぼん。」と繰り返してつぶやいてみました。すると前の方を行く鬼が立ちどまって不思議さうに一郎をふりかへって見ました。列もとまりました。どう云ふわけか鞭の音も叫び声もやみました。

しぃんとなってしまったのです。気がついて見るとそのうすくらい赤い瑪瑙（めなう）の野原のはづれがぼうっと黄金（きん）いろになってその中を立派な大きな人がまっすぐにこっちへ歩いて来るのでした。どう云ふわけかみんなはほっとしたやうに思ったのです。

四、光のすあし

その人の足は白く光って見えました。実にはやく実にまっすぐにこっちへ歩いて来るのでした。まっ白な足さきが二度ばかり光りもうその人は一郎の近くへ来

てゐました。

一郎はまぶしいやうな気がして顔をあげられませんでした。その人ははだしでした。まるで貝殻のやうに白くひかる大きなすあしでした。くびすのところの肉はかゞやいて地面まで垂れてゐました。大きなまっ白なすあしだったのです。けれどもその柔らかなすあしは鋭い鋭い瑪瑙（めなう）のかけらをふみ燃えあがる赤い火をふんで少しも傷つかず又灼（や）けませんでした。地面の棘（とげ）さへ又折れませんでした。

「こはいことはないぞ。」微（かす）かに微かにわらひながらその人はみんなに云ひました。その大きな瞳（ひとみ）は青い

蓮のはなびらのやうにりんとみんなを見ました。みんなはどう云ふわけともなく一度に手を合わせました。
「こはいことはない。おまへたちの罪はこの世界を包む大きな徳の力にくらべれば太陽の光とあざみの棘のさきの小さな露のやうなもんだ。なんにもこはいことはない。」
いつの間にかみんなはその人のまはりに環になって集って居りました。さっきまであんなに恐ろしく見えた鬼どもがいまはみなすなほにその大きな手を合せ首を低く垂れてみんなのうしろに立ってゐたのです。
その人はしづかにみんなを見まはしました。

「みんなひどく傷を受けてゐる。それはおまへたちが自分で自分を傷つけたのだぞ。けれどもそれも何でもない、」その人は大きなまっ白な手で楢夫（ならを）の頭をなでました。楢夫も一郎もその手のかすかにほほの花のにほひのするのを聞きました。そしてみんなのからだの傷はすっかり癒（なほ）ってゐたのです。

一人の鬼がいきなり泣いてその人の前にひざまづきました。それから頭をけはしい瑪瑙の地面に垂れその光る足を一寸（ちょっと）手でいたゞきました。

その人は又微かに笑ひました。すると大きな黄金（きん）いろの光が円い輪になってその人の頭のまはりにかゝり

ました。その人は云ひました。
「こゝは地面が剣でできてゐる。お前たちはそれで足やからだをやぶる。さうお前たちは思ってゐる、けれどもこの地面はまるっきり平らなのだ。さあご覧。」
その人は少しかゞんでそのまっ白な手で地面に一つ輪をかきました。みんなは眼を擦（こす）ったのです。又耳を疑がったのです。今までの赤い瑪瑙の棘でできた暗い火の舌を吐いてゐたかなしい地面が今は平らな平らな波一つ立たないまっ青な湖水の面に変りその湖水はどこまでつづくのかはては孔雀石（くじゃくいし）の色に何条もの美しい縞（しま）になり、その上には蜃気楼（しんきろう）のやうにそしてもっとはっ

きりと沢山の立派な木や建物がじっと浮んでゐたのです。それらの建物はずうっと遠くにあったのですけれども見上げるばかりに高く青や白びかりの屋根を持ったり虹（にじ）のやうないろの幡（はた）が垂れたり、一つの建物から一つの建物へ空中に真珠のやうに光る欄干（らんかん）のついた橋廊がかかったり高い塔はたくさんの鈴や飾り網を掛けそのさきの棒はまっすぐに高くそらに立ちました。それらの建物はしんとして音なくそびえその影は実にはっきりと水面に落ちたのです。

　またたくさんの樹（き）が立ってゐました。それは全く宝石細工としか思はれませんでした。はんの木のやうな

かたちでまっ青な樹もありました。楊（やなぎ）に似た木で白金のやうな小さな実になってゐるのもありました。みんなその葉がチラチラ光ってゆすれ互いにぶっつかり合って微妙な音をたてるのでした。

　それから空の方からはいろいろな楽器の音がさまざまのいろの光のこなと一所（いっしょ）に微（かす）かに降ってくるのでした。もっともっと愕（おどろ）いたことはあんまり立派な人たちのそこにもこゝにも一杯なことでした。ある人人は鳥のやうに空中を翔（か）けてゐましたがその銀いろの飾りのひもはまっすぐにうしろに引いて波一つたたないのでした。すべて夏の明方のやうないゝ匂（にほひ）で一杯でし

た。ところが一郎は俄(には)かに自分たちも又そのまっ青な平らな平らな湖水の上に立ってゐることに気がつきました。けれどもそれは湖水だったのでせうか。いゝえ、水ぢゃなかったのです。硬かったのです。冷たかったのです、なめらかだったのです。それは実に青い宝石の板でした。板ぢゃない、やっぱり地面でした。あんまりそれがなめらかで光ってゐたので湖水のやうに見えたのです。

　一郎はさっきの人を見ました。その人はさっきとは又まるで見ちがへるやうでした。立派な瓔珞(やうらく)をかけ黄金(きん)の円光を冠(かぶ)りかすかに笑ってみんなのうしろに

立ってゐました。そこに見えるどの人よりも立派でした。金と紅宝石（ルビー）を組んだやうな美しい花皿を捧（ささ）げて天人たちが一郎たちの頭の上をすぎ大きな碧（あを）や黄金のはなびらを落して行きました。

そのはなびらはしづかにしづかにそらを沈んでまゐりました。

さっきのうすくらい野原で一緒だった人たちはいまみな立派に変ってゐました。一郎は楢夫を見ました。楢夫がやはり黄金（きん）いろのきものを着、瓔珞（やうらく）も着けてゐたのです。それから自分を見ました。一郎の足の傷や何かはすっかりなほっていまはまっ白に光りその手は

まばゆくいゝ匂(にほひ)だったのです。

みんなはしばらくたゞよろこびの声をあげるばかりでしたがそのうちに一人の子が云ひました。

「此処(ここ)はまるでいゝんだなあ、向ふにあるのは博物館かしら。」

その巨(おほ)きな光る人が微笑(わら)って答へました。

「うむ。博物館もあるぞ。あらゆる世界のできごとがみんな集まってゐる。」

そこで子供らは俄(には)かにいろいろなことを尋ね出しました。一人が云ひました。

「こゝには図書館もあるの。僕アンデルゼンのおはな

しやなんかもっと読みたいなあ。」

一人が云ひました。

「こゝの運動場なら何でも出来るなあ、ボールだって投げたってきっとどこまでも行くんだ。」

非常に小さな子は云ひました。

「僕はチョコレートがほしいなあ。」

その巨きな人はしづかに答へました。

「本はこゝにはいくらでもある。一冊の本の中に小さな本がたくさんはひってゐるやうなものもある。小さな小さな形の本にあらゆる本のみな入ってゐるやうな本もある、お前たちはよく読むがいゝ。運動場もある、

そこでかけることを習ふものは火の中でも行くことができる。チョコレートもある。こゝのチョコレートは大へんにいゝのだ。あげよう。」その大きな人は一寸（ちよつと）空の方を見ました。一人の天人が黄いろな三角を組みたてた模様のついた立派な鉢を捧げてまっすぐに下りて参りました。そして青い地面に降りて虔（うやうや）しくその大きな人の前にひざまづき鉢を捧げました。

「さあたべてごらん。」その大きな人は一つを楢夫にやりながらみんなに云ひました。みんなはいつか一つづつその立派な菓子を持ってゐたのです。それは一寸嘗（な）めたときからだ中すうっと涼しくなりました。舌の

さきで青い蛍のやうな色や橙（だいだい）いろの火やらきれいな花の図案になってチラチラ見えるのでした。たべてしまったときからだがピンとなりました。しばらくたってからだ中から何とも云へないいゝ匂いがぼうっと立つのでした。

「僕たちのお母さんはどっちに居るだらう。」楢夫が俄（には）かに思ひだしたやうに一郎にたづねました。

　するとその大きな人がこっちを振り向いてやさしく楢夫の頭をなでながら云ひました。

「今にお前の前のお母さんを見せてあげよう。お前はもうこゝで学校に入らなければならない。それからお

前はしばらく兄さんと別れなければならない。兄さんはもう一度お母さんの所へ帰るんだから。」

その人は一郎に云ひました。

「お前はも一度あのもとの世界に帰るのだ。お前はすなほないゝ子供だ。よくあの棘(とげ)の野原で弟を棄(す)てなかった。あの時やぶれたお前の足はいまはもうはだしで悪い剣の林を行くことができるぞ。今の心持を決して離れるな。お前の国にはこゝから沢山の人たちが行ってゐる。よく探(さが)してほんたうの道を習へ。」その人は一郎の頭を撫(な)でました。一郎はたゞ手を合せ眼を伏せて立ってゐたのです。それから一郎は空の方で力

一杯に歌ってゐるいゝ声の歌を聞きました。その歌の声はだんだん変りすべての景色はぼうっと霧の中のやうに遠くなりました。たゞその霧の向ふに一本の木が白くかゞやいて立ち楢夫がまるで光って立派になって立ちながら何か云ひたさうにかすかにわらってこっちへ一寸手を延ばしたのでした。

五、峠

「楢夫」と一郎は叫んだと思ひましたら俄（には）かに新しいまっ白なものを見ました。それは雪でした。それから

青空がまばゆく一郎の上にかかってゐるのを見ました。

「息吐(つい)だぞ。眼開(あ)ぃだぞ。」一郎のとなりの家の赤髯(あかひげ)の人がすぐ一郎の頭のとこに曲(かが)んでゐてしきりに一郎を起さうとしてゐたのです。そして一郎ははっきり眼を開きました。楢夫を堅く抱いて雪に埋まってゐたのです。まばゆい青ぞらに村の人たちの顔や赤い毛布や黒の外套(ぐわいたう)がくっきりと浮んで一郎を見下してゐるのでした。

「弟ぁなぢょだ。弟ぁ。」犬の毛皮を着た猟師が高く叫びました。となりの人は楢夫の腕をつかんで見ました。一郎も見ました。

「弟ぁわがないよだ。早ぐ火焚（た）げ」となりの人が叫びました。

「火焚ぃでわがなぃ。雪さ寝せろ。寝せろ。」

猟師が叫びました。一郎は扶（たす）けられて起されながらも一度樵夫の顔を見ました。その顔は苹果（りんご）のやうに赤くその唇はさっき光の国で一郎と別れたときのまゝ、かすかに笑ってゐたのです。けれどもその眼はとぢその息は絶えそしてその手や胸は氷のやうに冷えてしまってゐたのです。

底本：「宮沢賢治全集5」ちくま文庫、筑摩書房
１９８６（昭和61）年３月25日第1刷発行
１９９２（平成４）年３月10日第６刷発行
入力：あきら
校正：伊藤時也
２０００年2月４日公開
２００５年10月18日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。